アララギ派歌人

丸山待子と小松屋河村家

矢島嗣久

一　待子の出生と生い立ち

歌人丸山待子の本名はマチという。待子は和歌の雅号である。マチは明治二十六年（一八九三）三月八日、別府南町の素封家河村家に生まれた。父は河村徳一、母はツタ、マチはその長女である。

マチは明治三十二年に別府尋常高等小学校に入学する。明治三十七年一月、母ツタが死去する。

マチは明治四十年、大分県立大分高等女学校に入学、同四十四年に卒業する。

小松屋河村家は当主が河村吉郎、長男が待子の父徳一であるとする。

二　小松屋河村家

河村家の商号は「小松屋」で代々関西方面に出荷する青莚問屋であった。別府の山手にあたる堀田地区や大分郡庄内村（現由布市庄内町）で生産した畳表となる青むしろを持ち船で大阪に運び、帰りには油を積んで帰ったという。当時、河村家は別府の西側山手にある堀田温泉の一帯を含む広大な田畑や地獄を持つ大地主であった。

待子の父徳一は明治三十九年（一九〇六）の町村制施行以来、明治四十四年まで町会議員、その間、郡会議員となった後、同年別府町初の県会議員に当選した。（昭和二年までは資格に納税制限があった）。多額納税者で別府銀行頭取、豊州瓦斯株式会社（現大分ガス）取締役になるなど別府財界の重鎮としても活躍した。明治二十六年（一八九三）、速見郡日出警察署別府分署の新築費と別府電信局創設に多額の寄付をして県から表彰されている。待子の兄（長男）観三は父徳一の意志を継ぎ、大正五年から別府町会議員二期、市会議員（副議長）となる。大正十一年設立の「（有限会社）別府信用組合」（市内永石通り四丁目）の第三代組合長として、その基礎を固めた。別府町上水道敷設委員、別府土地建物（株）社長、松濤館（しょうとうかん）・松栄館の所有者でもあった。松濤館は松原公園の西側山手にあった大きな芝居小屋で、松栄館は同公園の東側にあった映画館である。観三はそのほか、大分県信用組合連合会長、大分県山林会議評議員等の要職にあった。

三　「旧国道」と「別府の官公庁中心地」

小松屋河村家（別府市末広町二番五号）の東側、前通りは昔から別府でも広い道路で国道だった。その他は田畑だった。この道路は北に向かっては豊前街道又は小倉街道と呼ばれ、南に向かっては府内（現大分市）街道と呼ばれていた。街道は別府から高崎山の西側、中腹にある銭瓶峠を越えて府内に通じていた。

小松屋の前の道路付近には昭和初期以降、別府市役所、大分銀行別府支店、別府電報電話局、別府郵便局、別府信用組合、別府警察署等が存在する官公庁街だった。

別府市役所の跡地には、現在一階・市役所の南部出張所、二階・市立図書館、三階、四階・サザンクロス（市民の学習の場）の入居する庁舎がある。

大分銀行は現在秋葉通りに面していて大分銀行別府南支店となっている。

別府電報電話局の跡地は別府市の水道局をへて、現在、児童館（愛称、レンガホール）。別府郵便局は北浜に移転後、現在は餅ケ浜町の国道十号線西側に移転している。

南町の別府郵便局の跡地は旧浪花荘旅館（現中央葬儀社創業者　金沢一臣）・竹製品卸業の旧三田川産業となり、平成十六年十一月頃には有料駐車場となった。別府郵便局が北浜に移転した後、昭和十二年六月に河村観三が南町郵便局（現・末広郵便局）を設置、現在に至っている。

別府警察署は永石温泉付近から東側国道十号線海手側の浜町に移り、現在餅ケ浜町の国道十号線東側に移転している。

児童館（レンガホール）の前には明治四十三年創業の「長寿みそ、坂本長平商店」が現在も営業している。なお、この商店の右手の白壁の建物は、江戸時代の豪商「荒金たばこ屋」のものを移転したと言われている。その軒瓦には荒金たばこ屋の家紋も見ることができる。

四　丸山篤との結婚

マチは明治四十五年（一九一二）、二十歳で東京帝国大学（現東京大学）卒の報知新聞記者丸山篤と結婚する。

篤は大分市津守富岡（現滝尾地区）の丸山又作の養嗣子で、大正二年、養父母の懇望によりマチともども大分市に帰郷し、同三年より旧制大分中学（現上野丘高校）に英語教師として教鞭を執るが、大正十年（一九二一）六月、マチが二十九歳のとき死去する。マチは別府の実家小松屋河村家（当主・観三）に戻り、没年まで約二十年間同居した。同年十一月、実父河村徳一が死去する。

五　和歌と禅に生きる

大正十二年（一九二三）、マチは大分市金池の万寿寺の住職である足利紫山老大師の禅門に入る。

丸山待子

雑誌「アドバンス大分」によれば、マチの妹秋吉カタが「うちは昼は真宗、夜は禅宗」と端的に表現したように、河村家は真宗の西法寺（西本願寺派）の寺総代であったが、間宮英宗（大正七年から大正十五年まで方広寺派管長）、足利紫山（大分市の万寿寺住職、のち方広寺派管長）など禅の高僧に師事していた。

間宮英宗禅師が別府に修養道場「程道庵」を造ったのは、炭坑王の麻生太吉（麻生太郎外相の曽祖父）の別荘「五六庵」を訪れていた縁からだという。いまの別府中央公民館の場所は、広い麻生別荘の庭を道路で区切って作られたもので、すぐ下に伊予の菊池さんの屋敷があり、その二階を借りて程道庵は作られた。昭和十三年（一九三八）頃、丸山待子は妹秋吉カタとこの程道庵で間宮禅師の説法を受けたともいうが、すでに待子は人々へ禅の指導をしていたとも伝えられている。

この頃からマチは河村家と親戚になるアララギ派の淺利良道と歌道の交渉を始める。また、川谷静女史に就き茶道に入門する。淺利良三（一八九七～一九七七）は別府町の醸造業・淺利喜兵衛の三男。本名竜三郎。筆名は光三郎、のちに受戒して良道。五三〇〇首収録の「淺利良道短歌集」がある。

春やよし　宵やぬくしと　ゆるゆると
歩める人は　みな湯治客　　**良道**

アララギ派の同人・中村憲吉とマチが市内流川の日名子旅館で会ったのは昭和二年（一九二七）で、マチが三十五歳のとき。

当時、別府温泉には著名な歌人・斉藤茂吉、与謝野晶子、土屋文明、若山牧水、野口雨情らがよく訪れては日名子旅館を常宿としていた。以上の著名人や画家の片多徳郎、権堂種男、だるま絵の足利紫山（万寿寺住職）や勢家町威徳寺住職の瓜生鉄雄らが丸山待子を訪れていて、小松屋河村家は文化サロンの観を呈していた。

中村憲吉・アララギ派の同人。広島県の出身。

斉藤茂吉　・歌人で医師、雑誌「アララギ」を編集。山形県の出身。

与謝野晶子　・浪漫派の歌人、与謝野寛（ひろし）（鐵幹）の妻。

土屋文明　・アララギ派の歌人、群馬県の出身。

若山牧水　・宮崎県の出身。歌誌「創作」を主宰。

野口雨情は詩人で民謡、童話をよくした。茨城県の生まれ。「船頭小唄」、「はぶの港」、「十五夜お月さん」、「青い目の人形」等の歌を作った。雨情は来別の折り、この小松屋河村家の文化サロンに学校の先生達を集めて音楽会を開いていた。

待子は昭和三年（一九二八）アララギ派の歌人浅利良道、瓜生鉄雄、原常雄、安部俊市らと歌集「大分歌人」を創刊し、編集同人として活動した。

河村家と道路を隔てた東側の倉庫が印刷所になった。後、この場所が東洋印刷となった。当時、東洋印刷は別府市内で最初の印刷所でもあった。社主はマチの兄にあたる梶原君三であった。東洋印刷は君三の三男である三郎氏が引き継いでいた。平成十六年にはこの東洋印刷の建物も取り壊され、現在駐車場となっている。

河村家の姉妹は、本名がマチ、カタであるが、歌人の雅号を待子、方子と付けている。また、当時の名前の流行として、通称を待子、方子と称していたようである。

片多徳郎は洋画家で、豊後高田市の出身、文展、帝展で活躍した。権堂種男は洋画家で、大分市の生まれ。足利紫山は大分市金池の万寿寺の住職で、だるま絵を描くのを得意としていた。瓜生鉄雄は大分市の威徳寺（真宗本願寺派、現勢家町二丁目）の住職で歌人でもある。

別府市内の末広郵便局の右手北側の道路沿いに河村建一氏が建てた丸山待子の歌碑が建っている。河村建一氏は当時末広郵便局長を勤め、現在も別府八湯のまち興しの世話人として活躍されている。

薄氷の　とけてあわだつ　泡みずの
にごりめにたつ　春日となりぬ　　待子

昭和十年（一九三五）六月、待子は当時の文部大臣、松田源治（宇佐市出身）から人を通じて求婚されたが、「二夫にまみえず」と断った。この話を当時の新聞が取り上げて「東洋の最後の大和撫子だ」と報道した。「大和撫子」とは広辞苑によれば「日本女性の美称」である。

六　紙屋温泉と待子歌碑

紙屋温泉は明治初期からの名湯である。この温泉は、当時河村徳一の所有であった。小松屋河村家が建てたといわれている。明治七年には県費による改築が行なわれた。明治三十五年（一九〇二）頃は、南町の共同浴場となっていた。

紙屋温泉の建物の前に次の短歌二首が掲げられている。

ゆかしさに　だれしも汲んで　飲みやろうぞ
小春忘れぬ　紙屋おんせん　　寒心斎

寒朝を　温泉に足漫す　母上の
七十にちかき　齢をおもう　　丸山待子

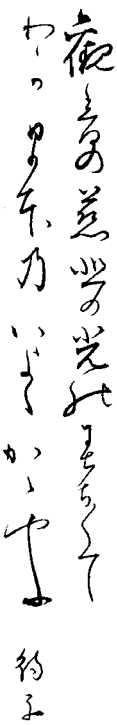
七　万寿寺に眠る

丸山待子は歌集は作らなかったが、浅利良道の撰による「丸山待子短歌集」がある。

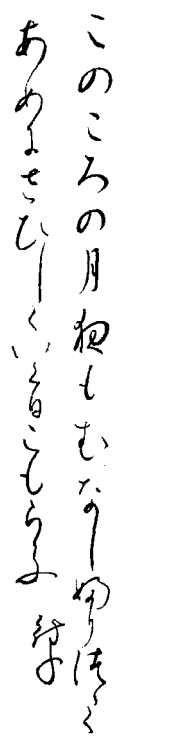
うつそみの　やすき心を　ねがいつつ
今宵はここの　御堂に座る

わくら葉の　落ち散る庭や　夫子なき
身の安けさを　さみしみ思う

待子は筆文字が達筆だった。学生時代には小筆で日記を記している。また、短歌も秀麗な筆文字で書かれている。次の筆跡がそれである。



（観音の慈悲の光のみちみちて
わか日の本のいよゝかがやふ）



（このころの月夜もむなしふりそゝぐ
あめにさびしくいく日こもらふ）

――。――

丸山待子（マチ）は尿毒症を患い、十日ばかり病臥して昭和十六年九月二十一日に死去した。享年四十九歳。

その日は日食のさなかだった。記録によれば、昭和十六年九月二十一日には台湾で皆既日食が観測されたと記されている。

待子の墓は大分市金池の万寿寺境内にあり、夫丸山篤と一緒に眠っている。マチの法名は「松濤庵心月明照大姉」。この墓は河村家の当主、マチの兄にあたる河村観三が建立したものである。

丸山篤、マチの墓の左手前に「荒城の月」等を作曲した楽聖、瀧廉太郎の墓がある。

〈丸山待子の絶詠〉

虫の音と　ともに絶えゆく　わがいのち
ただ南無阿弥陀仏　南無阿弥陀仏

昭和五十二年（一九七七）九月二十七日、大分市金池の万寿寺が主になって「丸山待子三十七回忌」が営まれた。

なお取材に際しては別府市末広町・河村建一、山の手町・梶原三郎、大畑・川田 康、浜脇・松尾常己、上田の湯・池田鋭太、るり子ご夫妻の諸氏に御協力をいただきました。紙上を借りて厚く御礼申し上げます。

引用参考文献

大分県歴史人物事典　大分合同新聞社　平成八年
別府今昔
月刊　アドバンス大分　一九八二年一月
別府史談　第九号　一九九五年
別府史談　第十四号　二〇〇〇年